

Title	バルバージャの家畜窃盗について
Author(s)	井本, 恭子
Citation	大阪外国語大学論集. 10 p.197-p.214
Issue Date	1994-03-18
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79628
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

バルバージャの家畜窃盗について

井 本 恭 子

《Abigeato》 in Barbagia

Yasuko IMOTO

Qui si tratta di 《abigeato》 che viene considerato una criminalità pastorale della Sardegna. La mia intenzione è osservare l'abigeato come fenomeno sociale collegato al mondo pastorale, e poi cercare la tipicità di questo fenomeno.

0. は じ め に

「サルデーニャには、その特殊な性格に起因する誘拐、窃盗、損害行為がみられる道徳的に病んだ地域が存在する。この《^{ゾーナ デュリンクウエンテ}zona delinquente》（犯罪地域）から多くの病原菌が飛散し、島全土に流血と惨事をもたらしている。」⁽¹⁾ これは、19世紀末の実証主義学者 NICEFORO の著『サルデーニャの犯罪』の一節である。彼は、内陸の牧畜地域バルバージャ⁽²⁾を犯罪というある種の「風土病」が蔓延するところだと指摘している。更に住人については《^{ラッツァ マレデッタ}razza maledetta》（呪われた種族）と呼び、次のような考察をしている。「バルバリチーニ（バルバージャの人間）は、原始国家と古代部族に典型的な道徳概念を備えている。法による裁判という考え方を持たず、強盗や窃盗といった犯罪を原始的で野蛮な道徳概念に則して、名誉ある行為と見做して実行する。」⁽³⁾ NICEFORO は、バルバージャの住人を攻撃的で適応性のない牧畜社会の前段階にいたタタール、スキタイ、モンゴル、ペドウィンなどの集団に重ねている。彼の説によれば、歴史的地理的孤立のためにヌラーゲ時代⁽⁴⁾のジャングルの掟と好戦的部族の血が結晶化され、「モラル」の概念が未発達なまま今日に至っていることをバルバージャに犯罪の温床をつくり上げた原因にしている。19世紀末から20世紀初頭にかけては NICEFORO のように、人里離れた牧畜を生業とする村特有の犯罪を《^{バンディティズモ}banditismo》とし、それを帰先遺伝的、慣習的な現象とする見方が強かった。しかし、1960年代頃から《^{バンディティズモ}banditismo》を民族学的、文化人類学的視点で論じる動きが出てきた。つまり、サルデーニャの犯罪形態は、それを生み出す古い体質の牧畜世界の中での対立、その世界の周辺の世界や現代文明との対立という社会的、経済的、文化的コンテキストの中で再考されるようになったのである。



図1 10,000人当りの家畜窃盗の割合(%) (1958年~1966年調べ)

本論では、牧夫との関わり深い《^{アビジェアート}abigeato》(家畜窃盗)を取り上げ、それを慣習や個人的性質のもととしてではなく、牧夫集団の生産関係の特徴を示すパラメーターとして考察してみようと思う。ここでいう「生産関係」とは経済的なものだけではなく社会的なものまで含んでいること、「牧夫集団」とは牧畜を生業とする者の集合体を指していることを断っておく。家畜窃盗を分析対象とするのは、それが牧畜地域全てに共通した現象ではなくサルデーニャ特有といってもよいからである。例えば地中海第4の島、コルシカ(面積8,682km²、人口218,500)ではサルデーニャと同じように牧夫が群れをガイドして荒蕪地や山岳地にある草地に放牧をする。しかし、コルシカには家畜窃盗がほとんどない。⁽⁵⁾ また、イタリアの州別家畜窃盗の割合(図1)をみるとサルデーニャがアブルッツォやシチリアとは比較にならない程多いのがわかる。これら2つの例からも、放牧という状況だけでは人は「家畜泥棒」にならないということになる。すなわち、家畜窃盗はその背景にある生産関係の特質によるものだと考えられる。ゆえに、①なぜ家畜を盗むのか、②その社会的効果は何なのかに焦点をあてて分析すれば、牧夫集団の特徴が見えてくるはずである。

本論は、家畜窃盗を導関数として当該牧夫集団全体像というもとの関数を求める試みである。資料としては主に1960年代、1970年代のサルデーニャに関する調査報告や論文を採用した。ただし、家畜窃盗を直接扱っているものは数が少ないことを断っておかなければならない。

1. バルバージャの彷徨う牧夫たち

PIRAはサルデーニャの牧夫について次のような認識をもっている。「彼らは牧夫である。しかし、牧畜従事者ではない。なぜなら、彼らにとって牧畜は単なる仕事ではなく、この地で『男』であるための在り方、営みを意味しているからである。」⁽⁶⁾ ANGIONIは農夫に牧夫を対置させて、「農夫は土地の洗練された職人のようなものである。牧夫は自然と競争する陸上選手のようなものである。古文書館や土地台帳のようなところも少しあるかもしれない。」⁽⁷⁾ と述べている。このふたりのサルデーニャの文化人類学者の表現は、実に見事に牧夫の特徴を捉えている。もう少し具体的に牧畜世界を示すために、牧夫がどのような環境で、どのような放牧を行っているのかみてみよう。

サルデーニャには約400万頭(羊約300万頭)の家畜がおり、1km²当りの家畜密度は110(人口密度67)である。(1983年現在)牧夫は約35,000人いるが、その多くはバルバージャ周辺に集まっている。ジェンナルジェントゥ山塊(標高1834m)はちょうど心臓部に当り、その周囲に約30ある人口数千の丘上集村が点在する。そこでは、人間と牧畜家畜の関係が技術面でも認知面でも昔からはほとんど変わらない放牧形態が存在している。つまり、生業主体である牧夫が生業対象かつ道具である動物の基本的習性(草食性、群居性、移動性)を利用しながら生活を維持しているのである。牧夫はできるだけ多くの利益(乳)を得るために、群に対して交尾、去勢、母仔家畜隔

離などの管理行為をするが、それ以外は群の必要性や自然条件に自らの生活を合わせている。農夫のように土地に定着して一方的に働きかけることはなく、50～100頭の群れとともに夏営牧地から冬営牧地と移動を行う。ただし、近年は100km以上の長距離移動はほとんど消滅し、数10kmの移動やコムーネの領域内で標高差を利用した短距離移動が主である。(図2) 牧夫が群を連れて移動する理由は2つある。まずひとつは、サルデーニャ産の羊は他種より暑さ寒さに敏感なため、冬の急激な気温低下を避けて低地へ移動する必要性にある。もうひとつは、気候が不順なため一年を通して牧草量が安定せず、慢性的リソース欠乏状態にある。(図3)サルデーニャでは土地の約70%が牧地として利用されているが、牧草量は年間せいぜい150万t 足らずである。全家畜の数からすれば少なくとも250万t の牧草が必要となるから、約40%の食糧不足状態である。⁽⁸⁾ 牧草量と家畜数のバランスがなかなかとれない状態で、牧夫の資本(群)を減らさないように維持するためには、できるだけ多くの牧地を確保しなければならない。コムーネの領域内の牧地だけでは必要な牧草量はとても望めず、他の地域へ牧地をもとめて移動することになる。勿論、人口飼料を使って不足分を補っているが、コストの面で問題がある。また、堆肥や化学肥料、散水施設による牧草量の安定という方法もあるが、その資本を投下する者がいないのである。

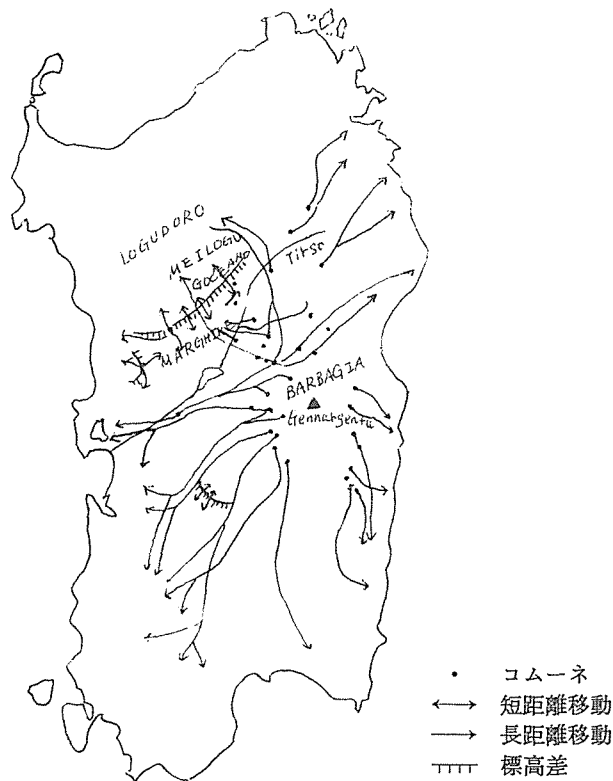


図2 群の移動方向と移動の種類
(《Pastori e contadini di Sardegna》—M.Le Lannou 1979 pp.170)

期 間	牧 草 量	家畜の必要量	差
4月1日～6月30日	68	28	+40
7月1日～9月30日	—	22	-22
10月1日～12月31日	8	24	-16
1月1日～5月31日	24	26	-2

(サルデーニャ自治州調べ)

*サルデーニャの内陸部の5つの地域を対象に牧草量及び家畜の必要量を1年間を100としてその割合を求めている。

図3 牧草量と家畜の必要量の対比

移動距離と方向については、コムーネによって異なる。(図2) パルバージャはジェンナルジェントゥ山塊の東と西で移動方向を分けることができる。まず西側のコムーネであるが、島の西岸から南西部へと牧夫は移動している。次に東側のコムーネであるが、島の東岸から南東部が主な移動先となっている。特に、マルギネ、ゴチェアノ、メイログ、ログドーロは、地元の牧夫が標高差を利用した放牧を行うため、牧夫がせめぎ合うところとなる。異なるコムーネの牧夫が集中すれば、文化的、社会的認識の差から緊張が高くなるのである。それはサルデーニャの居住形態が息苦しいまでに丘上に集住する特徴をもつことからわかるように、コムーネ自体が完結性の高いひとつの「世界」として存在することにある。同じコムーネに属さない＝価値体系を共有しない、という考え方が牧夫の緊張を否認なしに高めるのである。このような地域で家畜窃盗は起きやすいのだが、そのことについては後で詳しく述べることにする。

ここまでサルデーニャの生態に根ざした昔ながらの移動放牧の状況を説明してきた。そこで今度は、牧夫集団の生産関係をみていくことにする。牧夫集団は決して均質な一枚岩ではなく、生産手段(土地、家畜、労働力)の所有形態の差によってできたいくつかの牧夫層から成る。生産手段を集団全体からみれば、土地はある意味で共同「所有」、牧畜家畜は個人所有、労働力は結合所有という図式ができる。ここでいう土地の共同「所有」とは複数の牧夫が共同で土地を利用することである。敢えて「所有」という言葉を用いたのはサルデーニャでは19世紀半ばまで土地の私有化が進まず、土地はコムーネの成員である「みんなのもの」という考え方が根強く残っているからである。労働力の結合所有については、牧夫が全作業に必要な労働力を所有することは難しいため、他から労働力を調達することを指している。

では、個々の牧夫がどのような層を形成するのかみてみよう。牧夫の成層は時代とともに内部の力学が変化しているが、土地と家畜の所有形態を分類基準にしていることに変わりはない。以下に牧夫の層について分類したものをまとめておく。(図4)

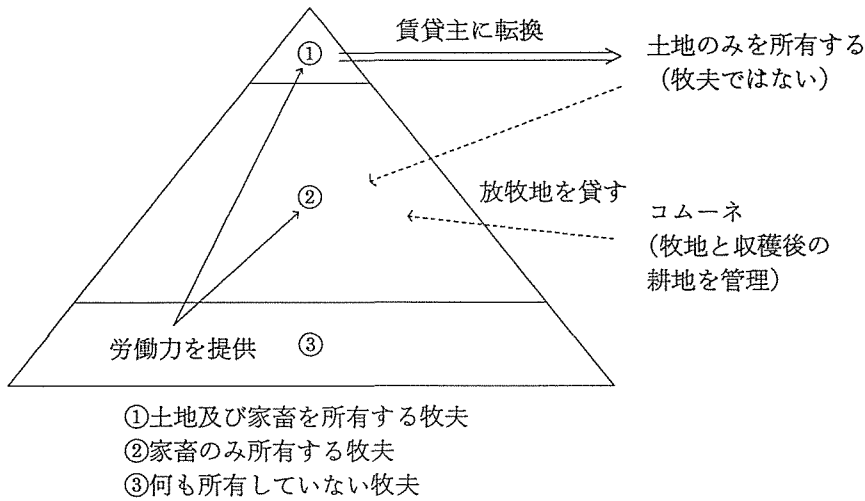


図4 牧夫集団の成層モデル

①群＋土地（牧地）の所有者

セルヴォ バストーレ
 《servo-pastore》（雇われ牧夫）を年契約で使いながら労働力の不足を補い、直接群を管理する。

②群の所有者

コムーネの共同牧地や私有地を借りて群を直接管理する。労働力の不足は、自分と同レベルの牧夫と協力することによって、あるいはセルヴォ バストーレ《servo-pastore》を雇うことによって補っている。

③群を所有しない者

①や②に労働力を提供するセルヴォ バストーレ《servo-pastore》として群の管理をする。

バルバージャには、②のタイプの牧夫が大部分を占め、①のタイプは1945年～1950年を境にかなり減ってしまった。現在は、土地は持たないが多少なりとも群を所有している牧夫が集団の中心となっている。したがって、牧夫どうしの牧地獲得競争が家畜の増加に比例して激しくなる。土地を持たない牧夫に放牧地を提供するのが、コムーネやかつての大規模な群（200頭以上）を所有していた者である。特に、後者は近年一般的になった存在で、19世紀末に始めて進出したラツィオ州の資本家によるチーズ工場がその大きな転換の原因である。それまでチーズは牧夫がクワイレ《cuile》⁽⁹⁾（野营地）でつくるのが普通であったが、チーズ工場ができてからは乳のみを売るようになった。また、ペコリーノ・ロマーノ《pecorino romano》⁽¹⁰⁾ という銘柄のチーズがアメリカで爆発的に売れはじめ、国内外の市場でその需要が増えたことにより羊の価値が跳ね上がった。牧夫は収入の約70%を乳から得ており、羊の数を増やしてできるだけ利益を上げようとしはじめた。その一方で、大きな群と土地を所有する牧夫は、過酷な牧夫生活をするよりも群を売り払って、貸し手市場の放牧地の賃貸をするようになっていた。牧夫の収入の55%が借地料に充てられることからわか

るように、放牧地の賃貸は大きな利益を生むからである。こうして牧夫集団内の成層力学は変化し、「群を所有する」という同じ条件下にいる牧夫どうしが、放牧地の賃貸主との関係や家畜数と放牧地のバランスをめぐるせめぎ合うことになる。

牧夫の生産関係を決定する枠、生産手段の有無による成層は、今世紀初頭から押し寄せる資本主義経済の波に呑み込まれつつも形を残している。勿論、さまざまな構成要素は市場経済の影響を受けて組み変えを余儀なくされたことは否めない。そのひとつの例として、放牧地の賃貸契約がある。昔は牧夫が羊1頭につき決められた乳の量で賃貸料を直接納めていた。契約は勿論、口頭のみであった。ところが、チーズ工場進出に伴い乳を買い取る仲介者が存在するようになり、牧夫はチーズの時価に関係なくあらかじめ設定された価格で乳を売り、現金で賃貸料を支払うようになったのである。仲介者は、牧夫に乳の代金を前払いしたり、放牧地の賃貸主と密な関係をつくり乳の確保に努めたりする。バルバージャの牧夫は、羊の数に釣り合うだけの放牧地を確保して乳からの利益が多くなればよいのだから、乳の行く先はどこでもよいと思っている。そして、現金さえ入れば放牧地獲得競争で有利になると考える。一方、貸す方も確実に賃貸料を支払う能力のある牧夫を優先させて、自分の利益を守っている。

このような変化はあるものの、牧夫が己のからだを道具にして群を移動させながら放牧するという生産形態は根本的に同じである。バルバージャの牧夫は物々交換レベルと市場経済の間を彷徨っている存在といえるかもしれない。

2. 牧夫集団の互酬性

牧夫集団にはさまざまな交換が存在する。交換されるものは、市場価値のある有形なものだけに限らず、労働や情報などのように無形なものもある。その交換においては、有形無形を問わず、互酬性が求められる。この互酬性とは等価の返礼の原則である。実際に牧夫が行っている交換をいくつか例にしながら、どのような互酬性が内在するのかみとめることにする。

まずはじめに、牧夫集団の交換が行われる場所について明らかにしておきたい。牧夫は《^{ビッダ}bidda》(村)／《^{カンパーニャ}campagna》(村の外)を基本的な空間概念としてもっている。《bidda》とは家族のいる居住空間のことであり、《campagna》とは牧夫が群とともに過ごす放牧地、すなわち労働空間のことである。一般的に《campagna》という語は、《città》(都会)に対置されて「田舎」という意味で用いられる。ところが、サルデーニャでは都市という概念が未発達なために、《campagna》は居住地域周辺の未知の広い空間を指しているのである。そのことは、まるで中世から時間が止まったかのごとく丘上に人家が集中しており、人口1万以上のコムーネがヌーオーロ県(98コムーネ)に2つしかないという点からもはっきりとわかる。また、牧夫自身も2つの空間を異なるものとして認識している。その例をひとつ紹介しよう。牧夫の伝統的な道具のひとつに《^{タスカ}taska》と《^{ベルトゥラ}bèrtula》と呼ばれる荷物袋がある。⁽¹¹⁾ 前者は羊や山羊の皮で作られた巾着

型リュックで、放牧に必要な食糧（パンやチーズなど）、小道具（ナイフ）を入れておくものである。後者はオルバーチェ（サルデーニャ産の毛織物）でできた大きな2つのポケットがあり、肩からかけた時にそれらが前と後にくるように共布の帯の両端に縫いつけてある雑囊のようなものである。中には食糧、メモ帳、着替え、文庫本などを入れている。牧夫は村の領域内ではこの《bèrtula》を持ち歩き、村を離れて野営放牧地へと移動する時は《taska》の方を使うのである。再び村に戻る時には、それまで持っていた《taska》から《bèrtula》へ持ち変えるのである。このことは、牧夫が村と村の外を全く異なる空間として意識していることを示している。

では、場所によって交換にどのような差があるのかみてみよう。まずはじめに、《bidda》での交換である。そこでは、家族（広い意味で大家族をも含む）、コムーネの成員としての義務、他の成員に関わる交換が行われる。冠婚葬祭の儀礼にあたる贈答行為、儀礼訪問、畑仕事の手伝いなどがそうである。言いかえると、結婚式、誕生日、祭の時に親族や友人に祝いの品を贈ったり、親族、友人、隣人が病気になれば必ず見舞いに行ったりすることである。畑仕事の手伝いというのは、労働交換のひとつと考えられる。ただし、牧夫が無償でする場合もある。これは19世紀末頃まで一般的だったもので、牧夫が異業種の者（医者、鍛冶屋、鞍屋、仕立て屋などの職人）に対してのみ行う労働力の提供である。それは《corvée》とか《arro^{コルヴ}dia^{アッロディア}》と呼ばれていた。⁽¹²⁾特に、牧夫が世話になった医者に対しては驚くほど「恩義」を感じ、返礼として畑仕事をするのである。BENEDICT が日本人の「恩」と「義理」を互酬性から説明して、前者を「無限の負い目意識」、後者を「有限の負い目意識」としたが、牧夫のケースはそれと似たところがあるように思われる。牧夫の無償の畑仕事は、均衡を欠いた互酬性であるから、他者との関係の継続性となる「恩」の意識を暗示しているといってもよいだろう。

ここで牧夫が《bidda》で行う交換を「返礼」の実行という点から分けると次のようになる。

①家族、親族間の交換

与えられたものにたいする返礼が既実行されずともよい。

②友人、隣人、その他コムーネの成員間の交換

与えられたものに対しては、できる限り決まった期間に返礼が実行されることが望まれる。

SAHLINS の分類に従うと、①は一般的互酬性、②は均衡的互酬性となる。このような互酬の考え方は、均衡へ向かう力の存在を意味している。つまり、互酬性が働くことによって《bidda》の社会的連帯性が強化され、安定に向かうということである。

では次に、《campagna》での交換をみてみよう。先で述べたように、《campagna》は労働空間であるから、牧夫が行う交換は放牧に関するものである。例えば、乳の貸借、羊の毛刈りやマーキングの時の労働交換といったものである。乳の貸借というのは、牧夫が《cuile^{クワイレ}》でチーズを作る場合、必要な乳が足りず仲間に借りることである。「仲間」とは同じ《cuile》で放牧をする牧夫を指しており、決してよその《cuile》にいる牧夫には頼まない。個々の《cuile》の独立性、排他性が非常に高いため、牧夫たちの連体性もその中に限られるからである。乳の計量

には専用の容器が使われ、牧夫は借りた分の乳を同じ容器に入れて返さなければならない、とANGIONIは言っている。

羊の毛刈りやマーキングについては、春（4月）の定例行事といった見方を牧夫はしている。毎年決まった日に決まった場所に牧夫たちが集まるからである。手伝ってもらった牧夫は返礼として食事をふるまうが、祭の時のように豪華にして感謝の意を表現する。このような行事、とりわけ毛刈りは家族が集まる機会であり、女たち、子ども、老人らが放牧地に入ることを許される時でもある。普通は仕事場に家族が入ることはめったにないのだが、毛刈りは牧夫の仕事の中でも形式的イベント性が強いから例外なのかもしれない。

以上、《campagna》で行われる主な交換を紹介したが、その中にはどんな互酬性があるのだろうか。《bidda》の交換と同じように以下にまとめてみた。

・牧夫仲間どうしの交換

乳や労働力の提供に対する等価の返礼が実行されなければならない。

《campagna》での交換は全て均衡的互酬性に相当すると考えてよい。とりわけ労働交換については、牧夫は《aggiudu torrau》^{アッジエウドゥ トッラウ}（相互扶助）という意識が強く、返礼の等価性が厳しく求められる。

それではここで、牧夫どうしの「相互扶助」に基づいた古い慣習《paradura》又は《ponidura》^{パラドゥーラ} ^{ポニドゥーラ}を取り上げてみようと思う。この慣習についてはDELLA MARMORA⁽¹³⁾が「サルデーニャ紀行」の中で次のように述べている。「不幸にして群を失ってしまった牧夫のために、仲間たちが1頭ずつ羊を出し合って被害者の群を再建しようとする慣習がログドローにある。」⁽¹⁴⁾牧夫が「不幸にして」家畜を失うのは、主に病気、不慮の事故、家畜窃盗が原因である。とすれば、この慣習は牧夫が何らかの理由で家畜を喪失した時の共済制度のようなものであり、補償には牧夫集団全体であたる個人と集団の間の交換と考えられるのではないだろうか。DELLA MARMORAがサルデーニャを放浪したのは19世紀初頭から中葉にかけてであるから、《paradura》の慣習は少なくともその頃まで確実に守られていたことになる。

このような慣習の存在は、牧夫集団の連体性の強さと均衡指向を示しているが、互酬性という点ではどうであろうか。牧夫の資本である家畜を失うこと自体あまり名誉なことではないが、仲間の損失は集団全体の損失と見做される。救済する方は「返礼」を期待するというよりも、「明日は我が身」という立場で相手に「貸し」をつくっておくのである。この「貸し」はいつかは返されるべきものであるから、最終的にはゼロ・サムのゲームのルールが働いていることになる。したがって、個人対個人の互酬ではなく個人対集団の関係の中に互酬性がある。個人対集団の関係と言ったが、家畜窃盗による家畜の喪失の場合はある牧夫の損失が別の牧夫の利得となるはずであるから、個人対所属集団対他集団の関係を設定する必要があると思う。《paradura》という慣習の互酬性とは質的に異なるものが家畜窃盗のなかにあるからだ。問題となるのは、家畜と盗んだ牧夫と集団である。家畜窃盗が発生するのは敵対関係にある場合が多く、盗む理由も個人

的に差があるけれども、自分は何も与えずに相手から「奪う」ことに変わりはない。これは、SAHLINSの言う「否定的互酬性」である。すなわち、差引残高を他よりも多くしようとして、一方的に働きかけることなのである。《paradura》の中では、個々が負債を追わないようにする緊張から互酬が作用しているが、その外にある集団では他を犠牲にして利を得るとうマイナスの互酬が作用していると言える。

ではここで、これまで述べてきた交換を互酬性によって図式化してみよう。(図5)

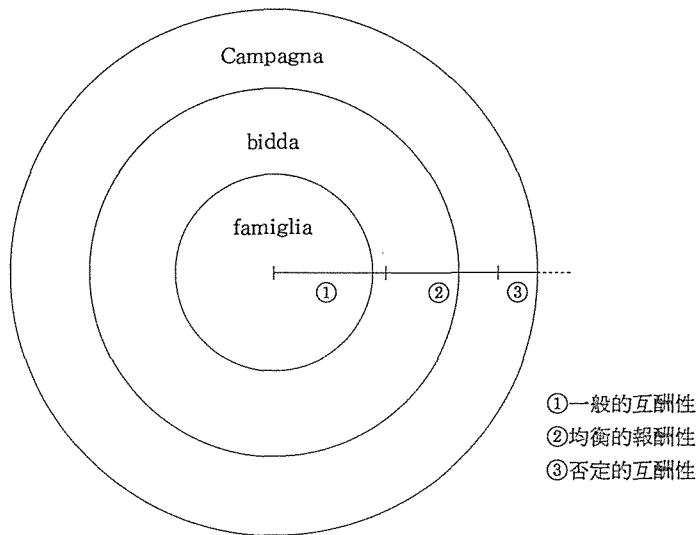


図5 互酬性とその領界

図のように、《bidda》内では一般的互酬性や均衡的互酬性が作用する交換が中心である。それに対して、《campagna》では均衡的互酬性に加えて、否定的互酬性をも含む交換がなされている。注目すべきは、《campagna》というのは先でも述べたように「村の外」の地域を示しており、異なるコムーネの牧夫がせめぎ合うところに、否定的互酬性の交換、家畜窃盗があるということである。

3. なぜ、家畜を盗むのか？

「奪うことは罪ではない」というサルデーニャの古い諺がある。遠くのコムーネや敵対視されているコムーネを犠牲にして利益を得ることは、規範的な慣習に触れることではないという牧畜民固有の考え方である。とりわけ、ベドウィンのように移動の自由を誇りにして「侵略と交易」を生存するための二者択一の戦術とする集団にその傾向が強いとされる。サルデーニャの場合、有史以前から「貧しさ」や過酷な自然環境と闘いながら、「生きること＝抵抗すること」であった歴史を経験しているゆえの生存する術として「奪う」という方法が認められていたのだと考え

られる。貧しい人間が必要に迫られて富める者から盗むことや自分の群を他人の広大な土地の一部に放牧したりすることは、牧畜世界の倫理では悪いことではなかったのである。むしろ、有る余るほど持つ者がいる一方で、飢える者がいるということの方が、もっと大きな不正であるとされていた。このような倫理は国家に起源をおく法的価値とは決して相容れない「民衆の法」固有のものである。ヌラーゲ時代 (B.C.1500～B.C.238) から、フェニキア、カルタゴ、ローマ、ヴァンダル、ビザンツ、ピサ、アラゴン、スペイン、ピエモンテと次々に支配者が入れ変わり、統一国家に組み込まれてからもまだ2世紀足らずであることを考えれば、牧畜世界の倫理が法の倫理に優先される土壌がサルデーニャにはあることは認めざるをえない。そうしたことが、家畜窃盗を社会的に「容認」する背景となっているのだろう。

では、具体的に家畜窃盗に関する統計からいくつか数字を拾ってみよう。1917年～1918年の間に約250万頭のうち0.3%の家畜が盗まれ、1960年～1965年の間では約350万頭のうち0.3%～0.6%が盗まれている。⁽¹⁵⁾ 届け出のなかったものも含めれば約1%の家畜が盗まれていると考えられる。最も多く盗まれるのは羊で、1917年には全体の69%を占めており、現在もその割合は変わっていない。勿論、家畜には必ずマーキングがあるので、盗まれるのはそれが付けられる前、生後4～5カ月の羊である。羊が対象として好まれるのは、小型 (平均体長1.59m、体重18～22kg) で運びやすいということ、搾乳による収入が期待できるということにある。事実、チーズ工場の拡大で乳の需要が高くなり羊の数は19世紀末から今日まで約4倍増えている。(図6) 牧夫の収入の約70%が乳によるものだということを考えれば、羊を盗む方がより確実に利にありつけることになる。羊に次いで多いのが牛である。1世紀程前までは耕作に牛を使っていたので、農夫には大切な労働力だったからである。雄牛よりも雌牛の方が盗まれる数が多いが、これは搾乳ができるからだと思う。しかし、近年の技術革新や農業の衰退とともに牛の需要が減ってしまい、盗まれることもなくなってきたのが現状である。

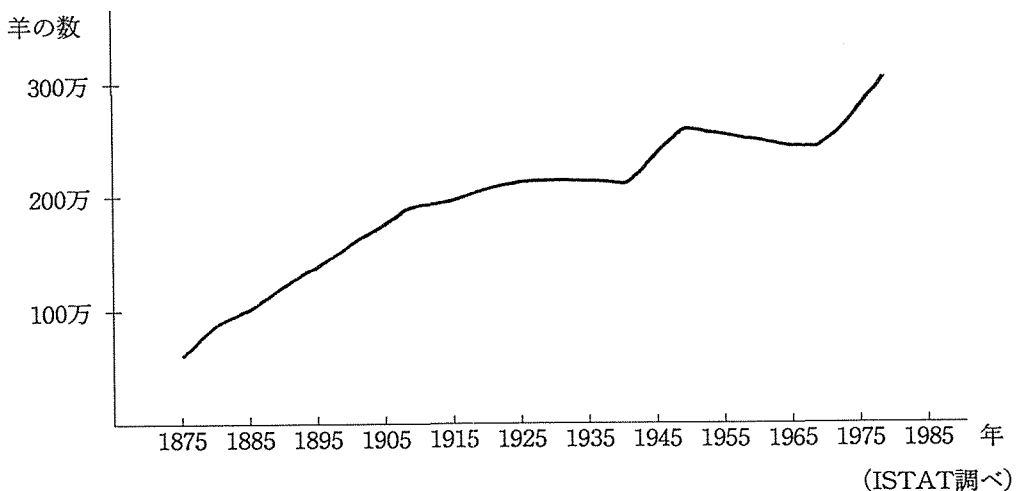


図6 羊の数の変化

次に家畜窃盗が多い時期と場所をみてみよう。時期としては1月～5月が最も多い。これは、雌羊が出産をしはじめるため乳が最もよく出る頃に当たる。搾乳は1日2回行いが、冬の一番よく乳が出る時で1日 $\frac{3}{4}l$ 、年平均約100 l （実質搾乳期間8カ月）の乳を得ることができる。ちょうど妊娠期に当たる6月～11月は乳の端境期となるため、盗む方もそれを計算して時期を選んでいのである。場所に関しては、島の中西部と中北部に家畜窃盗が多い。具体的な地域名を上げると、ティルソ川流域、マルギネ、ゴチェーアノ、メイログ、ログドーロである。なぜ、これらの地域に集中するのだろうか。その理由を考えてみよう。島の中西部や中北部にあるコムーネは、標高150m～1,200mのところ放牧地を有する。ゆえに、牧夫は標高差を利用して寒くなると低地へ降り、暖かくなると山の放牧地へ昇るという移動を反復させることができる。そうしたところへバルバージャの西から牧夫が冬営の放牧地を求めてやって来る。バルバージャのコムーネは標高600m～1,200mの丘陵や山地のみに放牧地を有するので、冬には低地へどうしても移動する必要があるからだ。図2からわかるように、ティルソ川流域、マルギネ、ゴチェーアノ、メイログ、ログドーロは、地元の牧夫とバルバージャの牧夫が集中して放牧を行っている。つまり、牧夫は互いに相手の監視下におかれている状況になっている。実際の放牧地での牧夫どうしの関係をみると、土地の利用形態によって2つに分かれている。

①コムーネの共同放牧地を利用する場合

一般に共有地はオープンフィールドで2～5つの群（1つの群は100頭前後）を受け入れるだけの広さがあるため、牧夫は4～5人の集団で利用しなければならない。牧夫どうしは《^{クンパンゾス}cumpanzos》（仲間）として土地を借り、あらゆることに対して連帯責任を負う。《^{クンパンゾス}cumpanzos 'e ^{エクロバ}croba》（仲間は夫婦のようなもの）という牧夫の言い方からもその関係の密なことがわかる。パートナーには群の安全な利益を守る能力がある牧夫が選ばれ集団全体として互いの群を管理できるようにしている。

②私有牧地を利用する場合

牧地は小片でありほとんどが囲い地であるから境界が明確にされている。牧夫はそれぞれが《^{ラカーナ}lacana》（境）を有することから《^{ラカナルゾス}lacanarzos》（隣接牧夫）と呼ばれる。彼らはお互いの群の移動について十分な情報をもっており、自分の利益に合わせて他の《lacanarzos》と結合したり敵対したりする。ゆえに、私有地の牧夫どうしの関係は両義性を含むことになる。

①、②の関係をもつ牧夫が島の中西部、中北部の土地にせめぎ合っているため、家畜窃盗が多いのだと考えることができる。面白いことに家畜窃盗の実行者をみると、そのほとんどがバルバージャの牧夫であり、被害者の方は地元の牧夫というケースが実に多いのである。事実、マルギネの人々はバルバージャの者を《^{インクダエ}incuddae 'e ^{エリウ}riu》（川向こうの奴）⁽¹⁶⁾ と呼び、川を越えてやって来る牧夫はレイダースであると考えている。自分たちはあくまで「襲われる側」だという被害者意識の強さのあらわれと言える。こうした対立は双方において家畜窃盗のもつ意味が異なることを暗示するのではないだろうか。そこで次は、バルバージャの牧夫とマルギネの牧夫がどのよ

うに家畜窃盗に関わっているのかみていくことにする。家畜窃盗のしくみを述べる前に、マルギネとバルバージャの牧夫がそれぞれのコムーネでおかれている状況の違いをまとめておきたい。

①牧畜従事者の割合⁽¹⁷⁾

マルギネ：約25%

バルバージャ：約40%

②人と羊の割合の変化⁽¹⁸⁾

1871年 マルギネ：人1に対して羊4

バルバージャ：人1に対して羊4

1970年 マルギネ：人1に対して羊5

バルバージャ：人1に対して羊19

③放牧地と家畜のバランス

マルギネ：コムーネの領域内にある放牧地で十分家畜を放牧できる

バルバージャ：低地にある放牧地がなく家畜も多いので慢性的土地欠乏状態

①、②よりマルギネは牧畜と農業が共存している地域であり、バルバージャは牧畜地域であるこ



図7 小麦栽培地域分布図
(《Pastori e contadini di Sardegna》
—M.Le Lannou 1979 pp.288)

とがわかる。(図7)では、このような地域差を牧夫がもっていることを理解した上で、家畜窃盗のひとつのモデルを示してみることにする。

まず、多くの家畜窃盗の被害者は、マルギネの牧夫であり、「実行者」はバルバージャの牧夫であるというのがパターンとなっている。ここでバルバージャの牧夫を「実行者」としたのは、家畜窃盗のオルグが別にいるためである。勿論、全ての家畜窃盗において必ずオルグが存在するとは、資料不足もあって断言はできない。が、家畜窃盗が行われる状況から考えると、オルグの役割をする牧夫がいると思われる。そしてこのオルグはマルギネの牧夫の可能性が強いことも付け加えておきたい。家畜窃盗のひとつのモデルとしたのは、被害者、実行者、オルグという関係

が絶対とは言えないからである。設定としてはいささか心もとないが、家畜窃盗の3人の役者がどのような演技方をするのかみていくことにする。

家畜窃盗が実行された後の被害者、実行者、オルグの動きとその周囲からはじめることにしよう。便宜上、被害者である牧夫をA、オルグをB、実行者をCと呼ぶことにする。牧夫Aは、残りの群の利益と安全を第一に考えて、ひとりで盗まれた家畜を追跡することはしない。自分のもつ牧夫のネットワークを利用して、まずは家畜窃盗のオルグの見当をつける。その場合、マルギネではあまり目立った活動をせず、バルバージャの牧夫たちの情報を積極的に得ようとする。自分の群を守れない無能な牧夫と見做されぬように、マルギネでは事の次第を隠しておく必要があるからだ。情報の提供を求められた牧夫は、どこに家畜がいるのか、どうやって家畜を「返して」もらえるかを教え、オルグの身元は決して明かさないというルールを守る。バルバージャでは、一般に犯罪についての情報をもつ者は近い親戚の者や非常に良い関係にある《Iacanzos》が被害者とならぬ限り、決して密告したり表ざたにしたりすることはない。自分が関係のない争いには関与しないという姿勢をとるのである。被害者の牧夫Aもそのところは心得ており、家畜を取り戻すことができればよしとする。ネットワークから得たさまざまな情報は整理され、牧夫AはオルグBとの交渉を仲介する者の見当をつける。それから仲介者（実は実行者Cであることが多い）を通して、オルグBと交渉をはじめめる。交渉がうまくいけば、牧夫Aは家畜を「買い戻す」ことができる。交渉は長い時で2年ぐらいかかるというから、かなりの忍耐を要する。オルグBの方は、盗んだ家畜の乳を売りながら維持費を得ることができるので、一刻も早く家畜を取り戻そうとする牧夫Aに比べると、交渉では有利な立場にある。

ここで少し、盗まれた家畜がどうなるのかを説明して、牧夫Aが家畜を「買い戻す」ということがなぜ可能なのかを示しておきたい。盗まれた家畜は次の4つの方法のいずれかで扱われる。

- ①祝宴や祭の贈り物としたり、自分が主催するパーティーで食事に出すなどして、即消費する。
- ②他の群に加える。
- ③屠殺して肉を闇で売る。
- ④所有者に買い戻しを要求する。

①は家畜の出所に疑いをもたれる危険があり、②は家畜を移動させて登録証明を偽造する必要があり、1945年以降強化された家畜窃盗予防対策によってその実行が難しくなった。③は共犯者として肉屋が要るが、島内及びイタリア本土での肉の需要が年々増加しているので、闇商売でいくらでも捌くことができる。その上、犯罪の証拠も残らないという利点もある。④は所有者が乳から得る利益に執着するため、必ず要求に応じてくる。実際に成功の確率も高く、実行も容易なのは4つの方法の中でも③、④である。オルグは④の方法を選択することが多い。こうして、被害者が盗まれた家畜を「買い戻す」状況ができるのである。

さて、オルグBと実行者Cの動きを追ってみよう。牧夫Cは盗んだ家畜をオルグBに引き渡して、その報酬を受ける。オルグBは、被害者の牧夫Aが交渉に向えるように自己のネットワーク

を利用して情報操作を行う。オルグBの属するコムーネでは、放牧パートナーとしての彼の評判に傷をつけぬように、できるだけ情報を制限しようとする。その一方で、バルバージャでは牧夫Cを使ってある程度の情報が流れるようにする。牧夫Cの方は被害者AとオルグBの仲介者ともなるので、自分に危険が及ばぬ程度に家畜窃盗の犯行をはのめかし、それに関する情報も流すのである。「有能な」牧夫という宣伝効果も狙ったうえのことである。その結果、マルギネの村びとは家畜窃盗はバルバージャの誰かがやったものだと思い、被害者の牧夫Aは仲介をバルバージャの牧夫に求めようとする。

以上、家畜窃盗に関わる牧夫たちの役割をみてきたが、それぞれの牧夫の目的は何なのだろうか。オルグBと実行者Cの家畜窃盗の目的を考えてみよう。オルグBの目的は、個人的な恨みは別にすれば、牧夫Aに損害を与えて自分の資本（群）の損失分を埋め合わせることである。前にも述べたように、マルギネは家畜数と放牧地のバランスがとれているので、誰かが家畜の数を増やせばその均衡が崩れてしまうことになる。放牧地の拡大の見込みは農夫が土地を捨てない限りあまりあるとは言えない。したがって、放牧地の獲得競争がこれ以上激しくならないように、家畜が増えている牧夫Aに損害を与えておく必要がある。オルグB自身は、何らかの原因で資本（群）の損失に遭っている。資本が減るということは牧夫集団内の地位が下がるということに繋がる。ゆえに、自己の相対的地位を維持するために、資本の損失補填を行おうとする。家畜窃盗は「埋め合わせ」の手段として利用されるのである。

次に、実行者Cの目的であるが、その前にバルバージャの牧畜生産関係の状況を確認しておきたい。マルギネと異なりバルバージャは完全な牧畜圏である。ゆえに、農業の存在による土地利用に関する制限もほとんどない。しかし、前に述べたように放牧地は慢性的欠乏状態にあるため、外へ外へと放牧地を求めて行かなければならない。家畜が増えれば、またどこかに放牧地を確保すればよいので、マルギネのような問題はない。バルバージャは最初からインバランスな状態であるから、牧夫は自由に自己の技量と才覚によって家畜を増やし放牧地を確保していけるのである。牧夫にとってはいかに資本を増やしていくのが問題なのだ。一般的に牧夫が独立して群を所有するには長い年月を要する。まず、見習い牧夫（無給）からはじめ、一人前になると父親から元手としてわずかな家畜を与えてもらい、一緒に放牧を続けながら自分の家畜を増やしていかなければならない。あるいは、《servo-pastore》（雇われ牧夫）として労働力を提供しながら毎年一定の家畜を収入として受けて、自分の群をつくっていく場合もある。父親の群は原則として死ぬまで譲渡されることはないから、若い牧夫が短期間で家畜を手に入れるのはほとんど不可能に近い。とすれば、マルギネで家畜窃盗の実行者となった牧夫Cの目的は、自己の資本（群）の蓄積にあると考えられる。家畜窃盗は、とりわけ資本を全く持たぬ牧夫やわずかな資本しか持たぬ牧夫にとって、資本蓄積の早道となるのである。こうした「不法な」資本蓄積をバルバージャの牧夫に可能とするのは、コムーネの社会的規制を受けることなく、自由に動き回れる孤立した存在であるからだ。

以上、オルグBと実行者Cのそれぞれの目的と考えてみた。まとめておくと、オルグBは資本損失の埋め合わせの手段として、実行者Cは資本蓄積の手段として、家畜窃盗を利用していることになる。では、被害者Aの立場から家畜窃盗をながめるとどうなるのだろうか。牧夫Aにしてみれば、家畜を盗まれたのだから家畜窃盗は「損害」以外の何ものでもない。ところが、牧夫Aは盗まれた家畜を《prestiti》^{プレスティティ}(19)（貸し付け）と考え、《m'appotorradu》^{マッポットラドゥ}（貸しは必ず返される）と言うのである。家畜が盗まれた時点で、被害者AはオルグBに一時的に資本を「貸し付け」る状態になり、交渉成立後はオルグBが返済することになる。これは、互酬の考え方を暗示してはいないだろうか。家畜窃盗という形をとっているが、実は被害者AとオルグBの勘定を合わせていると考えられる。

最後になったが、家畜窃盗の社会的効果をまとめておきたい。まず、マルギネのように牧畜と農業が共存する地域では、家畜窃盗は既存の牧夫集団の生産関係のバランスを保つ効果をもっている。次に、バルバージャのように完全に牧畜が農業に対して勝利を収めた地域では、家畜窃盗の資本蓄積の効果もち、牧夫集団の生産関係にインバランスをもたらすことになっている。全体としてみれば、バランスを維持している生産関係は、実は他の生産関係のインバランスの上に成立していることがわかる。BLAVが「市場における需要と供給のバランス維持のためには、既存の交換パターンをたえず攪乱する力が存在しなければならない。」⁽²⁰⁾と言っているが、そのことは社会状態についても同じである。サルデーニャの場合、攪乱する力として家畜窃盗が存在しているように思われる。なぜなら、家畜窃盗はある次元の均衡を支える力となる、その一方で、他の次元の均衡を崩す力として作用しているからである。結局、家畜窃盗はサルデーニャの牧夫集団にある秩序と破壊する分とはならず、逆に秩序を維持する方向に向かうものだとと言える。

4. むすびにかえて

冒頭で引用したNICEFOROの《zona delinquente》^{ゾーナ デリクウェンテ}（犯罪地域）、《razza maledetta》^{ラッツァ マレデッタ}（呪われた種族）というサルデーニャの呼び方は、現在でもイタリア本土で使われており、人々のサルデーニャに対する共通のイメージをつくり出している。彼らにサルデーニャのことを問えば、美しい海は別にして、10人中8人は犯罪者のメッカと言うだろう。事実、統計上は誘拐や家畜窃盗の犯人はサルデーニャ出身の牧夫が多い。我々の社会・文化コードからすればそうしたことは、法的倫理に反する犯罪以外の何ものでもない。ところが、これらの犯罪行為をサルデーニャの社会、文化コードで見直した場合、個人的な性質や状況、慣習を越えたところで形を変えて甦ってくるはずである。勿論、家畜窃盗が「正当な」行為だと言うつもりは全くないが、社会性の強い犯罪行為として扱う必要があること調しておきたい。その社会性とは牧畜世界にある牧夫の生産関係である。第1章で述べたように、サルデーニャの牧畜は季節移動と自然牧地の利用した放牧

を特徴とする。「そこにあるもの」だけが放牧を行うためのリソースであり、それは実に不安定な不確実なものである。そのうえ、放牧に利用できる土地は全て誰かが所有しているため、潜在的リソースも望めない。器の大きさは決っているのである。ゆえに、器の中身の方も全体として容量を越えぬようにする必要がある。つまり、既存の牧夫の生産関係がなるべく維持されなければならないのである。

経済的、社会的、文化的にサルデーニャが孤立状態にあった頃は、そうした牧夫集団のバランスは保たれていたと考えられる。しかし、現在は世界システムと無縁でいることは不可能である。サルデーニャも市場主義経済に取り込まれ、牧夫集団の生産関係に軋みができはじめている。これは19世紀半ばの「囲い込み法」⁽²¹⁾ 以来の大きな転換期である。家畜窃盗は、このような揺れの中で「抵抗装置」、「統制装置」としてあらわれているのではないだろうか。本論では、通時的に家畜窃盗を追うことはしなかったもので、社会が大きく変化する時に反作用的に起こる現象であるとは断言できない。しかしながら、家畜窃盗をサルデーニャの牧夫の生産関係にある「継続性」を支える力として捉えることはできると思う。BRAUDELの言う「ゆっくりとした歴史」はサルデーニャそのものの歴史であり、その速度を緩衡するものが牧畜世界のもつある一定量の抵抗エネルギーなのである。

[註]

- (1) A.NICEFORO;《La delinquenza in Sardegna》, Palermo, 1897, pp.27~pp.31.
- (2) 島の中西部に位置し、行政単位としてはヌーオーロ県に含まれる。
- (3) ibidem; pp.27~pp.31
- (4) 青銅器時代 (B.C.1500) からはじまり鉄器時代に最も繁栄したサルデーニャの土着文明。石を積み重ねてつくられた台形の要塞はヌラーゲと呼ばれる。
- (5) G.RAVIS-GIORDANI;《L'occasione non fa l'uomo ladro; l'assenza d'abigeato in Corsica》, Quaderni sardi di storia, n.5., 1985.1.~1986.12, pp.23~pp.30.
- (6) G.ANGIONI;《I pascoli erranti》, Liguori Editore, Napoli, 1989, pp.22~pp.28
- (7) ibidem; pp.22~pp.28
- (8) ibidem; pp.22~pp.28
- (9) 羊飼いの小屋を指す時と野营地全体を指す時がある。
- (10) 1885年~1890年にはじめて商品化される。《pecorino sardo》に比べて塩気が多くて辛い。
- (11) B.CALTAGIONE;《Il lavoro del pastore è sempre una fatica infinita》 L'uomo e le montagne, Silvana Editoriale, 1985, pp.243.
- (12) 《arroddia》は《roadia》が語源である。中世・教会のため信心会のために耕作や放牧を無償で行っていたことを示している。
- (13) フランス軍の将校であったが、ピエモンテ軍の将校となり20年間サルデーニャを旅する。
- (14) DELLA MARMORA;《Viaggio in Sardegna》, Forni, Bologna, 1975, Voll.1 pp.263.
- (15) D.MOSS;《Meccanismi di accumulazione e compensazione nel furto di bestiame in Sardegna》,

Quaderni bolotanesi, n.14, 1988, pp.176-pp.178

(16) 川とはティルソ川である。

(17) D.MOSS;《Bandits and boundaries in Sardegna》, Man, n.14, 1979, pp.477-pp.496.

(18) ibidem; pp.477-pp.496

(19) ibidem; pp.477-pp.496

(20) P.BLAV;「交換と権力」, 問場寿一他訳, 新曜社, 1985, pp.21.

(21) 1846年から土地の囲い込みがはじまる。1900年代初頭まで土地の私有化が推進されたが、バルパージャでは囲い込みをめぐって争いが絶えなかった。

参 考 文 献

D.MOSSi 《Bandits and boundaries in Sardegna》, Man n.14, 1979, pp.477-p.496, 《Meccanismi di accumulazione e compensazione nel furto di bestiame in Sardegna》, Quaderni bolotanesi n.14, 1988, pp.175-p.190

G.ANGIONI;《I pascoli erranti》, Liguori Editore, Napoli, 1989.

RAVIS-GIORDANI.G. 《L'occasione non fa (sempre) l'uomo ladro: l'assenza d'abigeato in Corsica》, Quaderni sardi di storia n.5, 1985, pp.23~pp.30

A.NICEFORO;《La delinquenza in Sardegna》, Palermo, 1897

R.CAMBA, N.RUDAS, G.PUGGIONI, E.SANDRELLI; 《L'abigeato in Italia: analisi del fenomeno con particolare riguardo alla Sardegna》, Rivista Sarda di criminologia, voll.III, fasc.3-4, 1967

M.LE LANNOU;《Pastori e contadini di Sardegna》, Edizioni della Torre, 1979

P.MARONGIU;《Teoria e storia del banditismo sociale in Sardegna》, Edizioni della Torre, 1981

G.MURTAS;《Una cooperazione difficile:pastori in Sardegna》, Edes, 1978

エルマンR. サーヴィス;「狩猟民」, 蒲生正男訳, 鹿島研究出版会, 1972

マーシャルD. サーリンズ;「部族民」, 青木保訳, 鹿島研究出版会, 1972

(1993. 9. 30 受理)